

Strix 8: 161-168 (1989)

## 東京都板橋区でつがいで個体識別され、繁殖したコゲラ

土橋信夫<sup>1</sup>

東京都板橋区の城北中央公園を中心とする地域では、1985年11月からコゲラが生息するようになり、1987年の繁殖期にヒナを連れた親鳥を観察、1988年と1989年には営巣活動を観察し、巣のヒナに足環をつけた。繁殖したつがいは、足環とつめの特徴から個体識別された同一個体であった。1980年代になって、東京などの市街地の緑地にコゲラが進出し始め（川内 1985）、最近では定着して営巣する個体も増えている（多賀 1988、石田・多賀 1988）が、個体識別のできた鳥について2年以上にわたる繁殖記録が得られたのは初めてである。本報では、このつがいの2繁殖期の営巣経過を中心に報告する。

### 調査地と方法

調査地は、東京都板橋区と練馬区にまたがる城北公園（35°45' N, 139°42' E）を中心とする地域である（図1）。城北公園は、面積が20.24haあり、園内にはサクラやケヤキなどの落葉広葉樹を中心とした1万本余りの樹木が植えられている。公園の東側には、小学校をはさんで安養院（寺）、氷川神社の照葉樹社寺林と雑木林があり、南側400mには板橋区立茂呂山公園、西側には羽根木頰いの森があり、その他、周辺には屋敷林も点在し、都区内にあっては比較的緑が豊かである。

1988年の営巣地は、東京都板橋区東新町2丁目の安養院の墓地で、西側の10mほどの高さの斜面上部にあるシラカシの枯枝に巣穴が掘られていた。斜面は藪になっており、道路を隔てて向かい側にある小学校では平日の日中はしばしば子供たちの声がにぎやかであった。1989年の営巣地は、桜川2丁目の古くからの民家の庭（約530m<sup>2</sup>）で、北側の道路に面した高さ1.6mほどのブロック塀のすぐ内側にある枯木に、道路とは反対側に巣穴の入口が掘られてあった。道を隔てた反対側には5階建てのマンションがあり、営巣木のすぐ脇に車が駐車していることも多かったが、周囲は住宅街で比較的人通りの少ない場所であった。

著者が本調査地周辺で鳥類の観察記録をとり始めたのは、1983年からである。

コゲラを含む鳥類の観察は、月15～20日、主に早朝の1.5～3時間、城北公園を中心にして付近を巡回して行なった。観察の際には、望遠レンズをつけた35mmカメラを携帯し、極力撮影記録につとめた。繁殖期に入る4月には、観察頻度を増し、コゲラの飛翔経路に注意して巣の発見につとめた。巣穴を発見してからは、ヒナが巣立つまでのほぼ毎日（1989年）、主に午前中に双眼鏡で給餌活動を観察し（表2）、撮影記録も行なった。親鳥

1989年10月20日受理

1. 〒174 東京都板橋区桜川3-20-1

城北公園と周辺の緑地

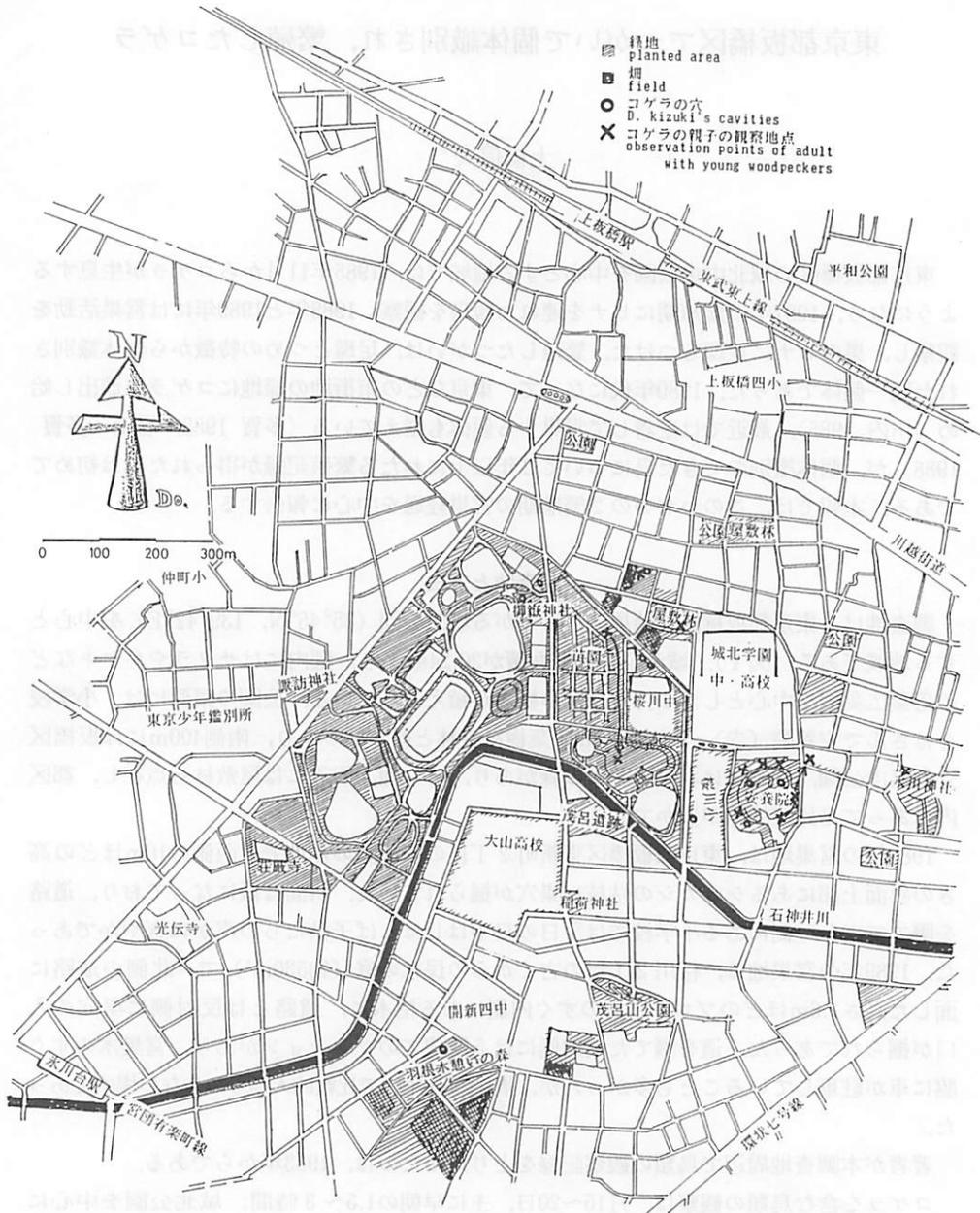


図1. 調査地周辺の緑地と、コゲラの穴および巣立ちピナの確認地点。  
 Fig. 1. Study area with the location of woodpeckers' holes and observation points of fledged juveniles in 1989.

は、観察者が巣から10mていど以上離れていれば、その存在をほとんど気にしない様子であった。

表1. 営巣木の特徴

Table 1. Characteristics of nest trees.

	1988年	1989年
樹種 tree sp.	シラカン <i>Quercus myrsinaefolia</i>	エゴノキ <i>Styrax japonica</i>
胸高直径 dbh	50cm	20cm
木の高さ tree height	約15m	約3.5m
入口の高さ hole height	8.1m	2.5m
穴のある枝の状態 condition of branch	枯れている dead	朽ちかけて柔らかい decomposed
入口の方向 entrance direction	ほぼ西向き W	南南東 SES

表2. 繁殖・営巣活動の経過

Table 2. Nesting histories.

月日 date	観察時間 obs. time	給餌回数 feed. freq.	備 考 notes
1988年			
4/14, 17, 18, 26, 27			巣穴から顔出し
4/29	7:50- 8:30	♂ 1	
/30	7:00- 8:05	♀ 1, ♂ 2	
5/10	8:00-11:00		ヒナ 4羽 (♂ 3, ♀ 1) に足環標識
/15	7:20- 7:50	♀ 3	
	11:00-12:00	♀ 3, ♂ 1	
/16	6:30- 7:30	♀ 1	
/17	6:48- 8:50	♀ 7, ♂ 1	
/18	6:55- 8:55	♀ 8	第3の個体飛来
/19	7:00- 9:00	♀ 6, ♂ 3, ? 1	
/20	6:30- 8:40		巣立ち?, 親鳥来てもヒナの声なし
1989年			
4/22	7:45- 8:10		巣穴から顔出し, 孵化?
/24	7:40- 8:50	♀ 2, ♂ 1	
/25	9:50-11:40	♀ 2, ♂ 3	
/26	7:50- 9:35	♀ 2, ♂ 2	
/27	7:30- 8:35	♀ 2, ♂ 2	
/28	7:13- 8:35	♀ 1, ♂ 2	♀がゴミをくわえて出た
/29	7:30- 9:30	♀ 4, ♂ 3	
/30	7:53- 9:20	♀ 3, ♂ 3	穴の中でヒナの声が聞こえる
5/ 1	7:34- 9:12	♀ 4, ♂ 3	雌雄とも (少なくとも昼間は) 抱雛せず
/ 2	11:55-14:00	♀ 3, ♂ 2	雌が初めてヒナの糞をくわえて出した
/ 3	7:50- 9:30	♀ 4, ♂ 2	雄の終認
/ 4	10:55-13:55	(♀ 5)	ヒナ 5羽 (♂ 3, ♀ 2) に足環標識
/ 5	7:45-10:45	♀ 12	穴の外からの給餌も観察
/ 6	8:05- 9:40	♀ 7	
/ 7	8:11- 9:35	♀ 7	すべての給餌を穴の外から行なった
/ 8	7:36- 9:45	♀ 11	
/ 9	7:30-11:35	♀ 18	
/10	7:30- 9:45	♀ 9	ヒナの糞を持ち出さず, ヒナが顔を出した
/11	6:35- 8:35	♀ 18	
/12	6:40- 8:45	♀ 19	
/13	6:30- 9:35	♀ 27	日中に♂ 2羽巣立ち, 1羽ネコに捕食される
/14	5:35-11:00	♀ 24	♂ 1 ♀ 2羽巣立ち, 10:44全部巣立ち後来巢

## 結 果

## 1. 生息状況と個体識別

1985年11月26日に城北公園で採食中のコゲラ2羽を初めて観察し、その後頻繁にみるようになった。12月30日には、1羽の右脚にカラーリング（白地の中央に緑の線）がつけられていることに気づき、撮影した。この個体は、1986年4月に羽色から雄であることがわかった。

1987年5月12日～19日の間、城北公園内で親鳥から給餌を受ける幼鳥2羽を観察した。この前日か前々日に、桜川小学校校庭の立ち枯れのヤナギの巣穴から巣立ったものと推測された（佐藤 私信）。この時の雄親は、上記の足環がついた個体であった。1988年の安養院および1989年の民家の庭における営巣つがいの雄も、上記の足環によって同一個体と特定された。この個体は、繁殖期以外にもときどき観察され、1989年1月22日には、捕獲して、右脚に環境庁の番号足環（3A01925）と左脚にカラーリング2個（ピンクとピンク）を追加して標識したが、1989年の営巣途中の5月3日を最後に姿を消した。

一方、1989年の繁殖つがいの雌を撮影した写真から、この個体の左足の第3趾のつめが欠如していることがわかった。それ以前に撮影した写真を改めて検討したところ、1988年に営巣した雌、1985年12月2日、1986年1月28日、1988年10月31日などに撮影した個体にも同一の特徴があった。この雌は、1989年5月29日まで、幼鳥と一緒にいるのが確認された後、10月現在観察されていない。1987年にヒナへの給餌行動を観察した雌の写真では左足第3趾の特徴を確認できなかったが、それ以前から足環のついた雄と一緒に行動していることから、1987年の繁殖個体も同じ2羽のコゲラである可能性が強い（石田 1986）。

これらの観察結果から、同じつがいが3年6か月余りにわたって本調査地に生息し、少なくとも3年続けて繁殖したことになる。



図2. 標識された雄（1989年4月10日撮影）。  
Fig. 2. Banded male (April 10, 1989).



図3. 左足第3趾のツメが欠けた雌（1988年10月31日撮影）。  
Fig. 3. Female with injured nail (III toe on the left foot, Oct. 31, 1988).

本調査地では、この2羽の他に、1987年4月22日に雄1羽、1988年5月18日に育雛中の巣で1羽、1989年6月1日に雄1羽がみられ、1989年8月9日には茂呂山公園で、雄1雌3の計4羽が激しく争うのが観察された。しばしば他個体が一時的に出現したが、2羽のみが定着していたものと思われる。

1988年5月10日に雄3雌1、1989年5月4日に雄3雌2の計9羽の巣内ヒナに、約10日齢の時点で環境庁の番号足環とカラーリングによって標識し、個体識別を行なった。

## 2. 営巣場所

表1に1988年と1989年の営巣木の特徴を示した。1988年の営巣木はシラカシ高木で、その中程に斜めに出た枯枝の下側、地上から約8.1mの位置に入口があった。斜面は低木におおわれていたが、巣穴の前に枝を張っている高木はなく、林の上層は開けていた。1989年の営巣木はほとんど樹皮が残っていないエゴノキの枯木で、先が折れて高さは約3.5mあり、巣穴の入口は地上から約2.5mの位置にあった。巣穴の少し上にも、入口だけの新しい掘り跡があった。巣穴の前の庭は5m四方ほど開けていた。

## 3. 営巣経過

表2には、観察時間と、給餌回数、繁殖・営巣活動の経過の概要を示した。1988年の繁殖期には、巣穴が利用されていることを4月10日に初めて確認した。親鳥が巣穴から顔を出すのがみられ、抱卵している様子だった。4月29日に親鳥が餌を運ぶのを観察し、ヒナが孵化したことがわかった。孵化日は特定できなかったが、12日後の5月10日にヒナに標識した際にまだ十分に羽毛が生えていなかったことから、発見は孵化直後だったと推測された。親鳥は雌雄ともに給餌を行なったが、どの日も雌の方が回数が多かった。

5月18日には、その行動と外見から明らかにつがい以外の個体が飛来し、巣穴の様子をうかがってから飛去した。5月20日には雄が餌を持たずに穴の中をのぞいていたが、ヒナの反応がなく巣立ちが終了したものと推測された。後日、幼鳥1羽を確認した(次項参照)。

1989年には、巣穴を4月22日に初めて確認した。巣立ち日の5月13、14日から逆算する



図4. 1989年営巣木。矢印が巣穴を示している。

Fig. 4. Nest tree in 1989. An arrow indicates the nest entrance.

と、この日前後に孵化したものと推定される。23日には観察を行わず、24日に給餌を確認した。この10日後の5月4日に標識したヒナは、1988年の約12日齢の個体とほぼ同様に成長していたが、より活動的であった。体重を測定したところ、雄が18.0, 17.5, 15.5g, 雌が17.5, 16.5gあり、個体間に2.5g, 約15%の差があった。

親鳥は雌雄ともに給餌し、給餌回数には明らかな差はなかった。雌雄が同時に巣穴へ飛来した時には、雄が先に給餌し、雄の行動の優位が示された。給餌頻度は、親がヒナの糞をのみこんでしまう前期には1時間あたり2.1~4.2回、親鳥がヒナの糞を運び出している中期には1時間あたり3.6~5.1回、巣立ちまでの後期には1時間あたり8.7~9.1回と著しく増加した。ただし、中期の途中から雄が飛来しなくなり、雌1羽だけによって給餌が行なわれたので、巣立ちまで雌雄で給餌した場合は、給餌頻度の増加がもっと大きい可能性もある。

営巣中の親鳥の採食活動は、城北公園、茂呂山公園および安養院で観察された。5月11日以降に給餌頻度が著しく増加してからは、巣のそばの庭で雌が採食するのも観察された。

5月13日の観察終了後の日中に雄2羽のヒナが巣立ち、14日には残った3羽の巣立ちを直接確認した。雄の1羽が最後に巣立った。1巣のヒナ4羽が1度に巣立った馬事公苑の巣の場合(多賀 1988)と異なり、2日間にわたって巣立つこともあることがわかった。また、標識時の体重の差とそれぞれの性から、体重の重い順に巣立ったものと推測された。

1988年に都内の馬事公苑で繁殖したコゲラでは、抱卵期が13日、孵化から巣立ちまでの巣内育雛期が20日であった(多賀 1988)。本調査では抱卵期間は確認できなかった。巣内育雛期間は、1988年・1989年ともに21日以上で、馬事公苑のコゲラとほぼ同様の日数であったと推定される。

#### 4. 巣立ち後の幼鳥の観察経過

巣立ち後のヒナは木の上の方において、その足環は葉陰になって確認するのが困難であったが、1988年には巣立ち後11日目の5月31日まで、雄の幼鳥1羽が調査地内にいるのが確認されていた。1989年には、5月13日に巣立った雄2羽の内1羽が、その日のうちにネコに捕食され、足環と羽毛などが回収された。その他の4羽の幼鳥は、屋敷林・安養院・氷川神社および城北公園で雌親と一緒に行動するのが観察された(図1)。ただし、観察がむずかしいので、一度に4羽は確認できなかった。5月29日に、安養院で雌成鳥と幼鳥および足環の確認ができなかった1羽と一緒に行動していたのが最後の観察であった。

#### 5. 給餌活動からみた食性

巣のヒナに給餌したうちで、最も多く観察されたのがアリ成虫とアブラムシであった。ついで枯木から掘り出した甲虫類の幼虫と思われるものが給餌された。その他に、アリ幼虫・ガ成虫・ムカデ類などがみられた。1988年には営巣中に草本からアブラムシを採食する成鳥が観察された。通常はくちばしにくわえてもってきたものを給餌したが、のみこんできたものをはき戻して給餌したこともあった。

## 考 察

東京の市街地の緑地に進出しているコゲラがどの程度定着しているのかを、具体的に示すには、なんらかの方法でコゲラを個体識別して観察する必要がある(上田・樋口 1988)。また、生息状況の中味を整理して記録することも求められる。石田(1987)は、定着につ

いて述べる中で、生息状況を5つにレベル分けした。そのうち、「同じ個体ないしはつがいが2年以上あるいは死ぬまでとどまっていること」を個体レベルの定着、「その地域で生まれた個体の多くがその地域内で繁殖し、1つの独立した個体群が形成されていること」を個体群レベルの定着と定義した。

今回の観察では、幸運にもすでにカラーリングのついた雄とつめに特徴のある雌がいたことにより、3年間、同じ2羽のコゲラが、個体レベルで定着していたことが確認できた。この2羽の個体は点在する複数の緑地を回って採食していた。1989年8月に茂呂山公園で4羽のコゲラが争っていたのは、この2羽の消失によってなわばりが空いたことによるのかも知れない。

また、飼育下のアカゲラとコゲラの観察では、根元から損傷したつめはそのままの状態に残り(石田 私信)、折れたくちばしは完全には回復しない(Ishida 1988)。今回の観察では、つめの損傷という特徴によって、野外においても長年にわたって個体を識別できることが示された。

面積が大きい自然林の個体群では、巣立った幼鳥は、通常でも秋まで、時には翌年の繁殖期直前まで、巣立ったなわばりの中で親鳥と行動をともにしている(石田 1986)のに対し、本調査地における3年間の記録では、いずれも巣立ち直後の5月下旬までに姿を消してしまった。これは馬事公苑における終認の7月1日(多賀 1988)よりもかなり早かった。幼鳥の消失原因の一部は捕食によるものであったが、生息環境が不完全なために分散し、安全な隠れ場所を得るためや採食のために緑地間を移動しなければならず、移動にもなって事故にあう危険が増していると考えられる。現段階では、都市の緑地で巣立った若鳥が同じ地域で育ち、なわばりを獲得して繁殖する可能性は小さいといえる。

今後も、足環をつけ続け、東京の市街地のコゲラに個体群レベルでの定着が起こるのかどうかを見守りたい。明治神宮など、比較的まとまった面積の緑地に生息するコゲラも、本調査地と同様に個体レベルで定着している可能性がある。足環をつけた上での観察が行なわれ、いくつかの異なる都市緑地におけるコゲラの生息状況が比較されることが期待される。石田(1987)がいうように、どの程度の面積や分散状態の緑地の集合があれば、コゲラが個体レベルあるいは個体群レベルで定着できるのか、コゲラを定着させるために我々に何ができるのかを解明していくことが、今後の課題である。

#### 謝 辞

営巣観察と標識にあたって、安養院ならびに石川竹次郎氏には、調査地への立ち入りを快く受け入れていただいた。桜川小学校の佐藤幹夫氏には、営巣の情報をよせていただいた。都市鳥研究会の川内博氏には、調査の諸般にわたってご指導いただき、東京大学演習林の石田健氏には、標識作業・本稿の作成などにあたってご助力とご教示をいただいた。これらの方々に、感謝の意を表したい。

#### 引用文献

- 石田健. 1986. コゲラの生活. 野鳥 51 (12): 18-21.  
 石田健. 1987. キツツキのすむ緑. 日本鳥学会キツツキシンポジウム資料. 9pp..  
 Ishida, K. 1988. Two examples of upper bill abnormality in woodpeckers, *Dendrocopos major* and *D. kizuki*. J. Yamashina Inst. Ornith. 20: 111-115.

- 石田健・多賀レア. 1988. 馬事公苑（東京都内）武蔵野自然林の植生とコゲラの穴木分布. *Strix* 7 : 213-230.
- 川内博. 1985. 東京の鳥類・2, 東京におけるコゲラ・アオゲラの平地部進出について. 日本大学豊山中・高等学校研究紀要 16 : 1-21.
- 多賀レア. 1988. 東京都馬事公苑におけるコゲラの営巣記録. *Strix* 7 : 291-295.
- 上田恵介・樋口広芳. 1988. 個体識別による鳥類の野外調査 — その意義と方法 —. *Strix* 7 : 1-34.

A record of one individually identified Japanese Pygmy Woodpecker pair during three breeding seasons in Itabashi, Tokyo.

Nobuo Dobashi<sup>1</sup>

I observed an individually identified pair of *Dendrocopos kizuki*, continuously. The male with a color ring on its right leg was first observed on December 30, 1985, in a city park in Itabashi, Tokyo. It bred three times near the park, in 1987, 1988 and 1989. It disappeared in the course of the nestling period in 1989. A female was identified by an injured nail of the third toe of the left foot. It was first recorded by photographs on December 2, 1985. It bred with the same as the above male with ring (s), at least in 1988 and 1989. It was last observed with its young on May 29, 1989.

The same as the above pair lived there more than three years and five months. A combination of small forest patches around Itabashi seemed enough habitat for a pair of this recently colonized small woodpecker species to breed (for a few years). The young, however, disappeared much earlier in the study area than in the natural area with continuous forest vegetation. I suppose the daily migration among forest patches, which is necessary for the woodpecker to get food and shade, is a disadvantage for the birds' survival and/or breeding.

The species is expanding its distribution in the city of Tokyo, and such observations as mine need to be accumulated to understand the cause and characteristics of the distribution and ecology of this species, and to manage parks as preferable habitat for the woodpecker.

1. 20-1, Sakuragawa 3-chome, Itabashi, Tokyo 174